

# 幼稚園児の成長と発達

～「環境」領域の要素と「自然」との関係についての再認識～

岡 島 俊 哉

Growth and Development of Kindergarten Children  
- Recognizing Relationship with "Nature" as an Environmental Element -

Toshiya OKAJIMA

## 要 旨

幼児教育については、平成29年度幼稚園教育要領において、「幼児の幼稚園修了時の具体的な姿」が定められており、幼児教育の境域には5つの基本である①情緒的安定、②主体性、③真の遊び、④発達、⑤コミュニケーション、がすべて自分と自分を存在させる周囲の「環境」と関わっていること、幼児に教育活動を行うにあたり、「環境」領域では3つのねらいに対して11項目にわたり、留意すべき事項が定められている。これらの事項（活動あるいは達成のために必要な要素）は相互に関連しており、また、「環境」以外の4つの領域（健康、人間関係、言語、表現）とも深く結びついている。このことを、「自然（環境）」になぞらえて再考察し、ある幼稚園児の成長の変遷を対象として検討したところ、幼児期の子どもの成長と発達において、教師の内面における文系領域（「心」の領域）と理系領域（「物＝身体」の領域）の真の融合が目指され、非言語活動としての「自然環境（要素）」が関わる場所に極めて大きい効果がある可能性を提案した。

### [1] 研究の背景

#### [1-1] はじめに、歴史

第二次世界大戦後の1947年（昭和22年）に保育要領が作成された。そして、同じ頃、幼稚園設置基準が作成された。その後、保育要領が改訂され、1956年（昭和31年）に幼稚園教育要領として示された。大きな改訂は、幼稚園教育要領に基づき、実情を反映した指導計画を作成することが義務付けられたことである。また、幼稚園設置基準作成協議会が設置され、1956年（昭和31年）に、幼稚園設置基準が示された。1989（平成元）年に幼稚園教育要領が改訂され、6領域が5領域（健康・人間関係・環境・言語・表現）に変更されて現在に至っている。主体的な活動が重視され、「遊び」を通しての「学び」の重要性が示された。しかし、昨今、保育ニーズの多様化や子どもの発達という視点から、幼児教育の再構築が目指されている。平成30年4月から実施されている幼稚園教育要領では、“より良い学校教育を通して、より良い社会を創る”ことが目標となり、学校と社会が連携・協働しながら、これから求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現が目指されている。

## [1-2] 幼児教育の基本を5つにまとめてみる

幼児教育の基本として幾つか上げられる。

第一に、学びの姿（知的探究心）が表に出てくるためには、「重要な他者（親あるいは大好きな先生）に自分の存在を丸ごと認めてもらうことができ、かつ、愛されている」ということが大切である。子どもが「自分が大切にされている」「愛されている」と感じながら、人と関わる喜びを味わうことができる環境を整えることが大事である。この「言葉にできない安心感」を学びに向かうための基盤として情緒的な安定性を培っていくことが重要である。

第二に、主体的に学ぶ姿が表に出てくるためには、本来備わっている子供の力を信じて引き出し、伸ばすことが大切である。これは真の意欲につながる。大人（先生や親）は、子どもの可能性を探り、できるだけ伸ばすことを望んで、多様な活動に向かわせたり、様々なことを「させる」ということをしてしまいがちである。子どもにはもともとヒトが生得的に進化の過程で備えてきた「環境への対応力」を持っている。かつてヒトは厳しい自然の中で集団を形成して協力して生き抜いてきた。ヒトは生得的に自分なりに課題を見つけて挑戦する能力を有する。そして、人の役にたつ喜びや、それにより自信を感じる経験を進化の過程で集団の中で身につけている。そしてその力は生涯を通じての人間形成に重要な関わりを持つ。子ども（が生得的に有している力）を信じるのが重要である。子どもにとっては何が起きているのか見通せない（不透明な）世界において、自分なりの課題を見出し挑戦していく幼児の姿は、現在の大人の世界でも求められている姿そのものである。

第三に、「真の遊び」とは何かを考えることが重要である。5領域のうちの「環境」領域では、「遊び」の環境を工夫することが根幹にある。一方で、大人の工夫が過剰になりがちで「指示的な、あるいは強制的な要素を持つ環境」を与えてしまいがちである。すなわち、「遊んでいる」というよりも「遊ばせられている」状況に陥っていないかを振り返ることが重要である。「環境」領域のねらいを実現するためには、「指示的な、あるいは強制的な要素を持つ環境」をできるだけ排除することが欠かせない。

第四に、「幼児期の発達の度合いは個性的で個人差が大きい」ということ意識して子どもに接しているか、ということである。子ども一人一人の「伸びようとしている力（発達のニーズ）を見出す」とはどういうことか、大人はどう行動すれば（接すれば）良いか、一人一人の状態に応じた最適な支援をどのように行えばいいか、その上、幼稚園教育では、その活動を集団の中で行い、集団を形成していかなければならないという先生の専門性も求められる。特に、つまづきが見られる子どもについては、問題の局所に目を奪われず、発達の全体像から子どもに接することが大切となる。ここで大事なこととして、子どもの「つまづき」を的確に見いだすことができる力を先生（自分）自身が常に意識できているかを振り返ることが大切である。

第五に、小学校以降の学校教育では「主体的で対話的で深い学び」が重要となる。「主体的」については、第二の部分で記したが、「対話的」な学びを実現するとはどういうことだろうか。対話は「互いに向かい合って話し合うこと」と記している辞書が多い。何と向かい合うのだろうか、モノとしての人であろうか。先生や親などの人、環境（自然）自体、本、自分自身などとの対話なども考えられる。そこには言語力を超えた「コミュニケーション」を成立させる力（コミュニケーション力）が必要である。人を説得できたり人と議論できたり、いわゆる言語力にとどまる力だけではない。ある人、例えば先生あるいは親などある特定の人と「コミュニケーションが成立している」とはどういうことだろうか、それを成立させる条件は、その人自身が子どもの「最も話したい相手」であること、これが唯一の条件である。先生に自分の話を聞いてほしい、先生の言葉を聞きたい（出会いたい）、それがコミュニケーション力を育成する。コミュニケーション力が身につくと対話できるようになる（対話する力を含んでいる）ので、対話的な学びを実現する

力を育成したことになる。言い換えると、その人との信頼関係が形成されている状態、とも言える。「コミュニケーション力がある」と言える条件は、話したい相手であること、信頼関係があること、と言える。一度、「コミュニケーション」という外国語の「日本語」を考えてみる必要がある。もし適切な日本語を思いつかなければ、どのような要素が不可欠かを考えてみる必要がある。では、「最も話したい相手」であるためには、信頼関係を築くためにはどうすれば良いであろうか。

### 〔1-3〕 幼児教育における「環境」の重要さ

前節で、幼児教育の基本として5つにまとめた。小学校以降の学習において、また、人の一生の学習において必要な「生きる力」はその5つの基本を基盤に育つといっても過言でない。大人は、この5つの基本をどのように意識して子どもに接しているであろうか、あるいは、どうすれば5つの基本を常に忘れずに子どもに接していけるだろうか。

「環境」という言葉の意味について簡潔に触れる。「環境」は辞書では、「①めぐり囲む区域。②四囲の外界。周囲の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界」とされる。「環境」を二つの漢字に切り分けて、それぞれの漢字の意味を考えてみよう。「環」は、自分の周りに環境要素がありそれらがお互いに関連していること(円形に取り囲む形で表されるとも表現できる)、を表す。「境」は自分とそれらの環境要素との区切りの部分(接する部分)を表す。その区切りをどこに位置づけるか、すなわち、自分とある環境要素との距離感あるいは関係を持つ程度を表すと言えるであろう。

幼児教育の5つの基本、①情緒的安定、②主体性、③真の遊び、④発達、⑤コミュニケーション、はすべて、自分と自分を存在させる周囲の「環」と「境」と関わっている問題であることがわかってくる。

幼児期は、周りの世界について、興味を持って意味づけていく最も重要な時期である。その営みが「遊び」であり、幼稚園ではその時間をできるだけ多くとる。言い換えれば、幼児教育では「環境」に主体的に関わり、子どもが自分の周囲(世界)を自分なりに意味づけていく時間を十分にとっていくことが大切である。

### 〔1-4〕 幼稚園教育要領(平成29年度)に見る「幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」

幼稚園教育要領(平成29年度)には、「幼稚園教育のねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿」、そして、教師が指導を行う際に考慮するもの、が示されている。

#### (1) 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

#### (2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

#### (3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

#### (4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

#### (5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

#### (6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

#### (7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

#### (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

#### (9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

#### (10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

これら10個の項目は、すべて、「環境」の「環」と「境」に関わる、そして、「環」と「境」そのものを考えることと等しい。

## [2] 研究テーマの設定

### [2-1] 研究題材ある園児の事例

ある私立幼稚園の園長先生と知り合いになった。知り合ったきっかけは幼稚園あるいは幼児教育とは全く関係がなかったが、幼児教育に関心を感じていた私は、ある園児の成長と発達に関わっていくことができた。そして、親御さんと頻回に話を聞くことになった。その経過を記述する。

その幼稚園児をAさんと呼ぶ。Aさんは、その私立幼稚園（B幼稚園とする）に通園していた。B幼稚園は自由な雰囲気の中で「遊び」を通しての「学び」を実践することで地域に知られていた。近くには小学校（C小学校とする）があり、B幼稚園を卒園した子どもたちの多くはC小学校に入学する。C小学校では、B幼稚園から入学してくる子どもたちが、（他の幼稚園とは異なった）自由な雰囲気を持ち込むため、指導に少々手こずるらしい。しかし、C小学校はB幼稚園の自由な雰囲気を肯定している。Aさんは、この自由な雰囲気の中で育った。家族構成は父親と母親と本人の3人である。

Aさんは幼稚園では年少期の頃から5分に1回の割合で問題（トラブル）を起こしていたという。幼稚園の先生は、A君から目を離すことができず（目を離すと他の園児とトラブルになるため）、親に発達相談窓口への相談を勧めた。親は専門機関に相談し、親としての関わり方を教えられた。また、親は“ペアレントトレーニング”の研修も受けるよう勧められた。

家庭では、母親、父親ともに、子どもとの言葉での対話にストレスを感じていた。感じ方が親子でほぼ毎日異なったりして親子共に感情的になり、ほぼ毎日怒っている、ということであった。しかし一方、最も幸せと感じるときも、子どもと接している時（夜の寝る前、お膝抱っこなど）、ということでもあった。

母親としては、幼稚園におけるトラブルの原因のほとんどが人間関係であったことで、まずは、「友達に誘われたら一緒に遊ぶ」、「自分から声をかけて遊び友達を見つける」ことができるようになって欲しいと思っておられた。また、「成人した時には、就職して自立できる子に育ててほしい」という願いであった。現在の状況から判断して、「最低でも、この状況までは成長してほしい」という親の願いであったと思われる。

親はこの頃から、専門機関の研修を多く受けていたようだ。これらの研修を通じて、教育の基礎理論に加え、子育ての日常の実務として子どもの行動分類（子どもの好ましい行動、好ましくない行動、危険な（許しがたい）行動）、肯定的（ポジティブな注目とその与え方、好ましくない行動とその減らし方、上手な無視の仕方、“無視”と“褒める”の組み合わせ方）、子どもの協力を増やすための上手な（効果的な）指示の出し方、より良い行動を増やす方策、制限を設けること、などを学んでいった。

A君は一人っ子であったので、親は、①子どもに任せること（親が先回りして与えたり、してしまうと子どもが本当は何が欲しい（したい）かわからなくなってしまふ）、②一人っ子を（兄弟がいなくて）かわいそうと思わないこと（子どもの自己否定につながるため。大事なことは逆に自己肯定感を育てることである）、③子どもどうして遊ぶ機会を多く作る（喧嘩、我慢、悔しい思い、喜びを共感させる）、④十分に甘えさせる（甘やかしてではない甘え、すなわち、子どもが親の愛情を必要としている時に甘えさせる、甘やかすは“見て見ぬ振りをする”、“何でも許して与えたりしてあげる”）、⑤手伝いで協調性を身につけること（感謝を伝えること“ありがとう”、人の役にたつ喜びを体験させることが協調性を育み、自分に自信を持つようにできる）、⑥期待をかけ過ぎないこと（親の顔色を伺うようになると自分の正直な気持ちを抑え込んでしまふ、本当の自分を正しく表現できなくなる、成長を見守る姿勢に徹することが大事）、であった。これは、“一人っ子を育てる6つの心得”でもあった。

その間も、A君はB幼稚園でトラブルを起こし続けていた。

幼稚園在籍中に、幾つかの専門機関を受診あるいは療育を受ける中で、親は子どもの様々な様子の変化を記録していった。記録に記載された内容を基に、専門機関から、幼稚園と家庭に対して方策の指導が行われていき、子どもを含めて三者が密接な連携をとる形で、情緒・行動面の安定を目指すいわゆる療育が進むことになった。理学療法、作業療法、言語療法のうち、作業療法が採用され、“我慢”と“切り替えができる”ことが目指された。

その間も、親は、自治体、地域の専門機関、および関連NPO等が行う保護者講座などを広報誌あるい

はインターネットなどで見つけ、それらの研修に数多く参加していった。

その間に、親は多くの気づきを得ていった。「発達障害」について、「愛着障害」について、「発達障害」に関する幾つかの疾病について、そして、それらについての有意義な視点と関わり方について：①環境の中で子どもを観察すること（家庭、施設、幼稚園、友人など）、子どもの心の中を想像すること、まで広く学習されていた。

母親の職業は元教師であったそうだが、その当時は、いわゆる現在でいう特別支援教育については全く学んでいないため、これら数多くの研修を受けて初めて、A君の状況をより正確に、客観的に観ることができるようになったそうである。それまでは、他の子どもと比較し、「なぜ我が子は他の子と同じではないのだろう」「なぜ、こんなに手がかかるのだろう」と思い悩んでいたとのことであった。

## 〔2-2〕 B幼稚園について

B幼稚園は独特な自由保育を行う幼稚園として地域に知られている。B幼稚園に関する保護者アンケートから、幾つか特記事項を記載する。本幼稚園の評価で高い項目（90%以上）は、全職員が協力して子どもの教育に当たっている（98%）、一人一人を大切に受け止めた保育が行なわれている（93%）、保護者の要望に応じた預かり保育が行なわれている（93%）、保護者への対応が適切に行なわれている（91%）であった。また、80%以上の項目は、教育目標が保護者の願いや期待を踏まえたものになっている、情報をわかりやすく伝えている、発達段階や興味・関心に応じた保育が行われている、相手の思いを受け止め豊かな人間関係を作ることができる子どもを育てるための保育が行われている、災害や事故時の対応について保護者に知らされている、PTA活動に協力的である、未就園児に園庭を解放している、などがある。相対的に評価が低い（70%台）としては、保護者の意見や要望に適切に対応している、幼小連携が円滑に行われている、があったが、後者の方では、近くの小学校の新一年生の中では、指導に手こずる幼稚園であることと関連があるかもしれない。

B幼稚園では、「遊び」の中での「育ち」を重視している。「子どもがやっていることに無意味なことない」「泥んこになっても粘土遊びばかりしていても子どもにとっては大事なことなのだ」、[乳幼児期は勉強より遊びが大事である＝遊びが勉強である、遊びに没頭することが深い学習につながる]という理念の下で教育を行っている。

## 〔2-3〕 B幼稚園における「支援」について

現在、子どもの育ちについては、学校をはじめ、多くの支援組織あるいは支援機関が地域にある。ここでは、主に、子どもを理解すること、行政サービスとしての「療育」、そして就学（小学校）について、が主な業務であろうと思う。例えば、「子どもを理解すること」については、発達が気になる（認知面、社会性、コミュニケーションの困難さ、こだわり、融通性、過敏あるいは鈍感）、子どもの困り感、子どもの問題行動、二次障害、子どもの見方・捉え方、などがそのテーマになるであろう。そして、療育では、そのような子どもを理解した点を踏まえて、子育ての基本的な考え方を学び就学に向けた支援を行う。

先に、一人っ子の子育てについての子育て6か条を記したが、ここには、幼児期の関わり方7か条として示しておく：①行動は子ども自身が人生を楽しむためにある、②親が当たり前のことが子どもの当たり前でない、③なんでも一緒に行い、それを楽しむ、④うまくいく工夫がある、⑤「普通は」ではなく、子どもが「できていること」を意識する、⑥できないことではなく、できること、が大事、⑦できる体験、自尊心・自己肯定感へ結びつける、など。

これまでの幼児教育の基本、学習指導要領に見るねらいあるいは項目、また、さまざまな支援やサービ

スで特に保護者が学ばれてきた多くの対策の内容についての資料は膨大で、幼稚園教育に関わる、あるいは特別支援教育に関わる多くの情報が蓄積されていった。それは、知識や技能であるが、多く、子どもと接する際の具体的な対処法（手続きなど）なども含まれている。

著者は、そのようないわゆるノウハウを聞いていく中で、あるいは、知っていく中で、気づいたことがあった。それは、その知識と技能の多くが、「環境」特に「自然環境」要素として大人（親や教師）が意識しておくの良い内容が多く含まれていたことである。

#### [2-4] A君への周囲の大人（親、先生、専門機関の担当者）の対応とA君の状態の変化（「環境」領域の内容11項目を例として）

幼稚園教育要領には、「環境」領域の内容が11項目挙げられている。この間、親、幼稚園、専門機関の三者が連携して、子どもの教育に関わってきたが、年長期まで成長するに従い、次第に変化が見られてきたという。そして、小学校入学後を心配されていた状況は劇的に改善することになる。この変化に対しては、親の「環境」領域への意識が向いたことがある程度成果を上げていたことがうかがえた。

##### (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

ものの質感、特性を、感覚として知っていく。関わる大人は、Aさんの好きな昆虫、あるいは初めて体験する料理の素材、など日常生活において目にする様々な事物を前にして、その都度その大きさ、美しさ、不思議さを言葉にして語りかけた。それらは親の独り言に等しかったという。なぜならば、Aさんが親の言うことに反抗することもあり、子どもにそれを受け入れることを強いていないからであった。親は自ら、それらの言葉を本心として発する。子どもはそれら一つ一つを耳にしていく。親は子どもがそれらを知っていく（納得して受け入れる）ために要する一定の時間を待った。一定の時間は数秒、数分あるいは月や年単位に渡った。そして、Aさんは、それまで声かけをしてきたあらゆることにはではないが、幾つかの事物について、(1)で示されている気付きを表現するようになった。実際には2～3年かかっていた。（大きく改善、小学校入学後の知識学習により思考が劇的に深まっている）

##### (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。

(2)の下線部については、Aさんはおもちゃや器具を分解することが好きであった。分解するための器具を使うことも好きのようであった。下線部については達成できていると言える。特に家庭で困った（悩んだ）ことは、分解して仕組みを探ろうとするため、様々な物品をバラバラにする（散らかす、あるいは汚す）、昆虫を殺してしまう、などについて、どのように対応して良いかわからなかったことだという。命の大切さを教えることで強いて良いかどうか、ということであった。（最初から興味・関心を持っていた）

##### (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

B幼稚園には畑があるので、作物の収穫を通して、特に季節の変化については力を入れて、作物の育ち方の変化や収穫時期など、変化に気付かせる取り組みを行っていた。また、家庭においても、母親自身が調理を好きであったこともあり、調理を手伝わせ始めたことで、様々な食材を通して、特に旬産旬消など季節についての気付きを与えていたようである。（その後の小学校での野菜を育てる経験も通して、気づきや疑問が深くなっていった）

(4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。

幼児期は、「遊びを与えなくても自然の中に放り出せば自ら遊び始める（遊びを見つける、遊ぶことができる）」とされ、親はそのことを実践していた。Aさんは年小期～年中期においては、何もないところで遊びを見つけることができていた。年中期から小学校に入ると、遊びの種類あるいは使うことができる遊具や道具の種類が増えるため、むしろ、「何もないところで遊ぶことができる」という「何もない」状況でどうするかを確認しにくくなりつつあった。「暇なとき」あるいは「興味を引く事物が何もないとき」にどうするか、で今後、(4)を達成しているか、を判断することになるかもしれない。（小学校入学後は、テレビなどとの関係をどうするか、で悩みあり）

(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

Aさんは、動物を飼ったことはない。昆虫を飼っているが（殺そうとするわけではないが、もて遊んで）結果として死なせてしまうことが多い。おそらく、(2)「その性質や仕組みに興味や関心をもつ」に関係した行動であるように思われた。現在でも昆虫を潰したり叩いたりして意識的に殺してしまうことがある。「かわいそうだから」「命は大切だ」という声かけは続けているそうである。（親は、生き物の「命」を奪うことが、成長と発達を考えたとき、どこまで許容されるか、という疑問の中にいる）

(6) 身近な物を大切にする。

Aさんは、物を大切にしようとしていると感じられなかった。大切にすると長く使うことができる、あるいは、お金を使わなくて済む、ということを手だ理解出来ていないように見える。使ったのちに放っておく、片付けない、などの行動が常時見られる。幼稚園においても家庭と全く同じ状況で、指示をした後、幾度声かけをしても行動しないことが多いため、時間通りに物事が進まないことに（担任の先生も）悩まれていた。しかし、時間によって動く環境である学校に入学すると、学校ではそのルールをきちんと守ることができることがわかった。家庭でも次第に、時間になると物を片付ける、などがかなりできるようになってきた、という。小学校入学を待つことで解決に向かいつつあると言え、ここまで3～4年かかっている。（劇的に改善してきた）

(7) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

Aさんはプラレールが大好きである。年少期から年長期にかけて、親と一緒にプラレールを作って遊んでいた。父親が鉄道が好きなので、相当凝ったものを作っていたため、A君はその技術を自然に学んでおり、しばらくすると自分でかなりの作品を作り出したようである（写真が残っている）。小学校入学からしばらくしてプラレールの遊びはあまりしなくなったようであるが、一つの遊びを通して(7)について十分に培われたと判断できる。A君の学びの特性として、身近にモデルがあって、モデルを参考に出来れば学びが進むということがあり、今後は、(7)の能力を他の様々な遊びあるいは活動に転移できるようになっていくかどうかを、期待して見ることになろう。（劇的に改善した）

(8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。

Aさんはポケットモンスター（ポケモン）が大好きである。近くに住む2歳年下のBさんもポケモンがAさん以上に好きで、競争心を持っていた。Aさんはほぼすべてのポケモンを誦んじることができる。ポケモンの輪郭を紙に書き写したり、あるいは折り紙を折り重ねてハサミで切って様々な切り抜きの形を楽

しむことができる。食事の際には、個数や液量の多さ、少なさも直ちにわかる。特に幼児期に問題になることはなかったが、小学校入学後の算数などにおいて、どの程度学習に結びついていくかを見ていくことになろう。(ある程度、身につけている。今後の成長も期待)

(9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

Aさんは、車で移動するとき、道路標識を見ることが好きであり、また、車のナンバープレートを見ることが好きである。親が運転しているとき、Aさんが標識を理解できるようになったので、道路標識の速度制限を守っていないことを注意されて、困ることも多いそうだ。小学校入学後は、毎日、ノートにページ単位で文章や漢字を書いたりし始めた。(身につけている。今後の成長も期待)

(10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。

親は、キャンプなどのアウトドア、公園、また雨天のときには、児童館、博物館、図書館、科学館など様々な場所に連れて行っていったようである。また、母親は、「子どもは何もないところでも遊びを生み出す」という考えを持っていたので、家の周囲、原っぱなどでも十分に時間を取り、子どもとの触れ合いを楽しんでいたそうである。(身につけている。今後の成長も期待)

(11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

Aさんの親の実家では、祝日に必ず国旗を掲げる。この家庭では、週末には実家に行くことが多いというので、子どもは国旗を頻繁に見ることになる。「あなたもそうしなさい」とは言わないし、国旗を掲げる意味は子どもにはわからないだろう。しかし、一年を通して見れば頻回に国旗に接することになる。将来、国旗が子どもにどのような位置付けとして定着するか、国旗掲揚が持続されていくかはわからないが、少なくとも子どもは、学校行事における国旗掲揚だけを経験する子どもとは異なる感覚を持っていると期待したい。「国旗に親しむ」の「親しむ」ためには、子どもは経験が少ないと「親しむ」にふさわしい程度まで身につかないのではないかと、国旗はその典型例のように感じている。(今後の様子を見る)

## [2-5] その後のAさん(年長期)の状況(計画書から抜粋)

表1には、Aさんの年少期から年長期(6歳)及び小学校2年生(7歳)になった時を比較して、年少期と比べて、保護者が成長(発達)したと感じられる程度を示した(アンケート)。「0」は、年少期と比べて、あまり改善が感じられなかった項目、「1」は改善を感じることができた項目、「2」は大きく改善したと驚きを感じた項目である。この結果から言えることは、大きく2点である。第一に、年少期から年長期にかけては大きい改善(成長、発達)を感じることはできなかったが、小学校入学後に大きな改善が見られている点が多いことである。第二に、「環境」領域では多く「2」がついた項目が多いが、「人間関係」領域では、未だ「1」が多いことである。

家庭や幼稚園での生活で感情的になる場面が見られる、我慢・切り替えが苦手であることは変わらない、しかし、その程度は改善していた(表1)。小学校入学時のトラブルを心配していた親は、小学校との情報交換をすることで、小学校生活を送っていけそうだ、と感じたという。専門機関では社会生活技能を訓練していた(心理・社会生の促進、認知的機能の学習、情緒・行動面の安定)。専門機関の本段階における総合評価は「目標達成、作業療法の効果を認める」であった。様々な能力が大きく改善していたことは、表1からもわかる。

就学に向けて、幼稚園及び当該機関の相談室が介入され、学校が決定された。

ただ、母親は毎晩、寝る前に絵本の読み聞かせをされており、その冊数は累計で1,000冊を超えているそうである。また、Aさんは幼稚園での預かり保育時に本を読む姿がよく見られていたそうである。

### 〔2-6〕 その後のAさん（小学校1～2年生）の状況（計画書などから抜粋）

「初対面と場に置いて最初は緊張するが、しばらくして（場に慣れてくると）表情が緩み素直な反応が見られるようになる。指示や取り組みが円滑に感じることができる。取り組み中に不安や緊張が生じやすい。疲労による集中力が切れやすい。本人の状態が取り組みに影響しやすい面はまだある。見通しを伝え、最後まで取り組む意識を保っていた。学校では周囲をモデルとしながら学校に適應できている。状況変化や自身の失敗を察知しやすく、不安や緊張につながり能力を十分に発揮できなくなる可能性はまだある。疲労の影響を受けやすい。誤答があるとわかると意欲や集中力が低下しやすい。」

「緊張や不安に敏感、疲労が能力発揮に影響しやすい。」

母親は年長期に続いて、毎晩、寝る前に絵本の読み聞かせをされていた。また、Aさんは小学校2年生において友達と本の貸し出し冊数を競っていて、最近、「本を最も多く読んだ」という賞、作品などで自治体から「優秀賞」などを受けるまでになったそうである。

自ら挑戦する姿勢を支援してもらえ、環境の中で、子どもが大きく成長し、また、経験したことは自己調整の発達を大きく促していたと言える。

また、本論文では割愛するが、「言語」「表現」の領域にも大きな変化が現れてきている。学校で単に「いいね」と言われるよりも、「元気を出して」と言われる方がいい」と言ったそう。内面の大きな発達が期待出来る報告であった。

## 〔3〕 総括

### 〔3-1〕 5領域に見る「環境」要素を表す言葉（「環」と「境」、下線部）

「幼児の幼稚園修了時の具体的な姿、そして、教師が指導を行う際に考慮するもの」で「環境要素」を表すと考えられる言葉を挙げてみる。

#### (1) 「健康な心と体」の具体的な行動

「触れ合う」「（体を）動かす」「戸外で（遊ぶ）」「楽しんで（取り組む）」

「身に付ける」「清潔にする」「（必要な行動を）自分でする」「（生活の）仕方を知る」「（必要な行動を）進んで行う」「（行動の）仕方がわかる」「安全に気をつけて（行動する）」

#### (2) 自立心

「自分で考え自分で行動する」「（自分でできることは）自分でする」

「やり遂げようとする気持ちを持つ」

#### (3) 協同性

「共に過ごす」「共感しあう」「伝える」「気付く」「一緒に楽しさを味わう」

「共通の目的を見出し協力する」「考えながら行動する」「関わりを深める」

「思いやりを持つ」

#### (4) 道徳性・規範意識の芽生え

「決まりの大切さ（に気付く）」

#### (5) 社会生活との関わり

「（共同の遊具や用具）を大切にしみんなで使う」「（人に）親しみを持つ」

表1. 親の主観的な成長・発達の評価(保護者アンケートから抜粋)

| 内容項目番号     | (1)                            | (2)                              | (3)                        | (4)                               | (5)   | (6)                            | (7)                                   | (8)                                      | (9)                           | (10)                   | (11)                            | (12)                | (13)                                 |
|------------|--------------------------------|----------------------------------|----------------------------|-----------------------------------|---|--------------------------------|---------------------------------------|--|-------------------------------|------------------------|---------------------------------|---------------------|--------------------------------------|
| 人間関係       | 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。          | 自分で考え、自分で行動する。                   | 自分でできることは自分でする。            | いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。 | 友達と積極的にかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。                  | 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 | 友達のおかげに気付く、一緒に活動する楽しさを味わう。            | 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。 | よいことや悪いことがあることに気付く、考えながら行動する。 | 友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。   | 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付く、守ろうとする。 | 共同の遊具や用具を大切に、みんなです。 | 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深い人々に親しみをもつ。 |
| 年長期(6歳)    | 0                              | 1                                | 0                          | 0                                 | 0   | 0                              | 0                                     | 0  | 0                             | 0                      | 0                               | 0                   | 0                                    |
| 小学校2年生(7歳) | 1                              | 2                                | 1                          | 1                                 | 1   | 1                              | 1                                     | 1  | 2                             | 1                      | 1                               | 1                   | 1                                    |
| 環境         | 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く | 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。 | 季節による自然や人間の生活に変化のあることに気付く。 | 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。         | 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付く、いたわったり、大切にしたりする。 | 身近な物を大切に                       | 身近な物や遊具に興味をもつてかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。 | 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。                    | 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。      | 生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。 | 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。             |                     |                                      |
| 年長期(6歳)    | 0                              | 1                                | 0                          | 0                                 | 0   | 0                              | 1                                     | 1  | 1                             | 1                      | 1                               |                     |                                      |
| 小学校2年生(7歳) | 2                              | 2                                | 1                          | 2                                 | 1   | 1                              | 2                                     | 2  | 2                             | 2                      | 1                               |                     |                                      |

2: 年少期(4歳)と比べると劇的に発達した(改善した)  
 1: 年少期(4歳)と比べると発達した(改善した)  
 0: あまり発達したと感ぜられない(改善が見られない)

(6) 思考力の芽生え

「美しさ、不思議さ (に気付く)」「性質や仕組みに興味や関心をもつ」  
 「季節による変化に気付く」「身近な事象を取り入れて遊ぶ」「物を大切ににする」  
 「考える、試す、工夫する」「情報、施設に関心を持つ」「国旗に親しむ」

(7) 自然との関わり・生命尊重

「生命の尊さに気づき、いたわったり大切にする」

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

「数量、図形、標識、文字に関心を持つ」

(9) 言葉による伝え合い

「興味関心を持ち、親しみを持って聞いたり話したりする」「自分なりの言葉で表現する」  
 「人の話を聞き、わかるように話す」「(日常の) 挨拶をする」  
 「言葉の楽しさや美しさに気付く」「絵本や物語に親しむ」「想像する (楽しさを味わう)」  
 「文字で伝える (楽しさを味わう)」

(10) 豊かな感性と表現

「音、色、手触り、動きに気づいたり感じたりして楽しむ」  
 「(美しいもの、心を動かす) 出来事に触れ (イメージを豊かにする)」  
 「音や動きなどで表現したり書いたり、作ったりする」「素材に親しみ工夫する」  
 「音楽(リズム楽器)に親しむ」「かざる」「演じる」

下線部の言葉は、すべて「環」と「境」を表す言葉と考えられる。5領域のうち「環境」領域の内容11項目と関わりのない項目はないと考える。一方、これら10個はすべて「環境」領域以外の4つの領域とも深く関わっている。教育要領における区別は程度の差と捉えることもできるのではないだろうか。

5つの領域を合わせると、内容の項目数は52に上る。幼稚園の先生は多くの項目を頭に入れて刻々と子どもと触れ合う必要があり、実際にそれを行っているであろう。その能力の基盤は何であろうか。幼稚園の先生も、先のAさんの親もおそらく、52項目を頭に入れて、状況に合わせて刻々とその都度、一項目ずつ記憶から引っ張り出して実践しているのではない、と考える。特に、親は最初からできなかつたことは明らかである。知らなかつた、学習していなかつたのであるから。

先生は子どもと接するプロフェッショナルである。マニュアルやハンドブック的な対応ではないはずである。幼稚園の先生を育成する際に、様々な知識や技能を知り教授する必要はあるのだが、それがマニュアルやハンドブック的な教授法に、そして、実際に子どもと接する際にマニュアルやハンドブック的な対応にならないようにしなければならない。

### 〔3-2〕 5領域に見られる「環」・「境」と「自然」

「自然」というと、普通は「人」や「社会」「人間関係」は除かれることが多い。この状況では、「自然」と、「人」あるいは「人」に関わる事象、例えば「社会」や「生活」とは意識の上で融合して捉え、事象に対処するという見方や行動にはなりにくい。環境分野では「人と自然の共存」という言い方をしばしば聞く。その表現では、「人は自然の一部」「人と自然はそもそも不可分の関係」という意識になりにくい。対峙する関係になりがちではないか。それは「コミュニケーション」ではない。

先生や親は、環境への生得的な適応力を、直面する環境に応じて（人生の必要な場面で）自然の大切さを（まずは自己に好ましい形で）思い出す、という状況に陥ってしまわないように意識することが大切である。そのような状況では多く、その必要な場面は自分自身に関わることであって、子どもあるいは他者に関わることより優先されてしまうかもしれない。

ここで、5領域における「環」と「境」が想起される言葉を拾い出してみよう。

#### ①「健康」領域

「先生」「友達」「戸外」「食べる」「生活リズム」「身の回り」「生活の場」「病気」「危険な場所」は「環」である。

「(安定感をもって) 行動する」「動かす」「楽しむ」「楽しんで」「身につける」「自分でする」「進んで行動する」「気をつけて行動する」は「境」である。

#### ②「人間関係」領域

「先生」「友達」「良いこと、悪いこと」「きまり」「遊具」「高齢者」「地域」などの言葉がある。そして、「人間関係」の領域であるから、「関係性」が重要であることがわかる。これは「環境」の中の「境」の意味である。例えば、「自分と周囲との関係」であり、「共に過ごす」「喜び」「自分で行動」「自分でする」「楽しみながら」「共感」「伝える」「気付く」「協力する」「思いやり」「みんなで使う」「親しみを持つ」など、数多く「関係性」を表す多くの言葉が出てくる。「境」は、自分と自分の存在を可能にしている自然の要素を示す「環」と自分との区切りはどこか、距離感はどうくらいか、すなわち、自分にとってそれらの環境要素はその程度意識しておくべきか、どの程度の関わりをしていくべきか、であり、「人間関係」領域では「関係性」＝「境」に気づかせるということになるであろう。

#### ③「環境」領域

「自然」「季節」「動植物」という語句が、狭い意味での「自然」を直接に連想させる語句である。

「環境」の「環」が示すところの人を存在させる要素としては、(2)「様々な物」、(6)「文化や伝統」、(7)「身近な物」、(8)「身近な物や遊具」、(9)「数量や図形」、(10)「標識や文字」、(11)「情報や施設」、(12)「行事」「国旗」などは、すべて「環」を示す要素である。

「(不思議さに) 気付く」「関心をもつ」「取り入れる」「(親しみを持って) 接する」「大切にする」「興味を持って関わる」「親しむ」はすべて「境」である。

#### ④「言語」領域

「言葉」「話」「表現」「注意」「あいさつ」「絵本」「物語」「文字」などが見られ、これは「環」である。「関心を持ち」「聞いたり」「感じたり」「尋ねたり」「分かるように」「(楽しさ、美しさに) 気付く」「豊かにする」「(想像する、伝える) 楽しさを味わう」は「境」である。

#### ⑤「表現」領域

「音」「色」「手触り」「動き」「美しいもの」「心動かす出来事」「素材」「音楽」「歌」「楽器」は「環」にあたる。

「気付く」「感じる」「(イメージを) 豊かにする」「書いたり作ったりする」「工夫する」「(楽しさを) 味わう」「使ったり飾ったりする」などは「境」である。

5つの領域で記載の仕方は異なるものの、「環」と「境」に関する言葉が多く使われている。そして、それらの言葉の表現は多少異なるにしても5領域の間で共通して現れる。

子どもには、まずは自我が芽生え、その後、内なる社会(超自我)を作っていくと聞いたことがある。自我と超自我の身につく時期は同時ではないため、自我の芽生え始めた時期は抑制が効かず、親としては「反抗期」とも言いたくなるような時期を経験することになるようである。まさに、「～したい自分」と「周囲(親)や社会が求める自分(期待、要望、役割)」が異なる、まさにそのような時期だったのであろうか。そしてAさんはまさにそこに「情緒」に関する環境問題を噴出させた、とも言える。通園中は、親は小学校に入学したらどうなるのだろうか、と日々、思い悩んでいた。幼稚園において5分に1回はトラブルを起こす状況であったからである。Aさんは現在、小学校2年生になり、幾つかの課題を抱えつつも、特別なやりとりはほぼ解消するほどの小学校生活を送っている。

最後に、Aさんの劇的な変化には関係機関、幼稚園との連携を保った親という三者の連携が効果的であった以上に、親の日常の非言語的対応、言葉にできない安心と感情的な安定性、環境への対応力を信じて子供の力を信じて引き出し伸ばすことに努めた、指示的あるいは強制的な要素を持つ環境をできるだけ排除した(時間、約束などに関することは除き)、発達の度合いは個性的で個人差が大きいことを受け入れた、多くの研修による知識や技能の蓄積により「つまづき」を的確に見いだすことができた、最も話したい相手であるように(信頼関係を大事にする)という真のコミュニケーションに努めた、ことが良い状況に結びついたと言えるのではないだろうか。それは、ハンドブックやマニュアルでは実現できない姿であった、と解釈したい。

## [4] 結論

子どもの特性は様々である。

短所として挙げられやすいのは、「怒りっぽい、キレやすい、短気、忘れ物が多い、うっかりが多い(不

注意)、落ち着きがない(多動性)、変化に弱い、初めてのことに抵抗が強い、集団になじめない、待てない(衝動性)、視線が合いにくい、呼びかけを無視する、人に関心が低い、自発的に交流しない、過度に礼儀正しい、興味の偏り(固執性)、癩癩、攻撃的(他害)行動、空気が読めない、規則に反抗する、人を故意に苛立たせる、自分の失敗を他人の所為にする、イライラしやすい、立腹しやすい、思い込みが激しい」などである。しかし、これらを短所とされる一方で、長所ともされることもある。こだわりが強い→几帳面で丁寧、衝動的→判断が早い、目移りしやすい・集中力がない→発想が豊か、落ち着きがない→ひょうきんで面白い、協調性がない→周囲に左右されない、など。それらが、先生や親の関わりによって多くの場合に改善されていくのはなぜだろうか。重要なことは「専門性」であろうか。

「子どもの居場所、安全基地が必要である」「愛着が大切である」「愛着者の存在が大切である。」「愛着とは情緒的な絆である」「愛着関係、信頼感は子どもの安心感・安全感を保証してくれるとともに最適な自律を可能にする」。その具体的な行動の例は「話を聞く」「受容する」「共感を持って接する」などがある、などを実現できる根拠は「専門性」だけではないように思われる。人が生来、生得的に集団の中で獲得してきた「自然的」要素も重要ではないだろうか。

子どもの行動には必ず理由があるという。しかし、子どもたちは理由を言えないことが多い。また、直前の出来事が原因とは限らない。そこで、「気付こうとする」「理解しようとする」「状況を推測しようとする」、そして行動として、「共感の姿勢を見せる」「褒める」「好ましい行動に注目する」「自尊心を大切に」「自信を育てる」ように様々な行動をする。そこでもなお、最も大切なことは、「あるがままの自分を受け入れてもらえる(依存の体験)」ことが欠かせない。「子どもの可能性を信じつつ、寄り添う大人」の存在が欠かせない、それは、子どもにとって将来のモデルともなる。

先生も親も、「説教をしない」「自分の考えを押し付けない」「非言語コミュニケーション(声の調子、表情、姿勢、目の動き、態度、身振り)を大切に話す方」を心がけ、「相手のペースに合わせる(ゆっくり、はっきり、間を置いて、声のトーン、口調、鏡のように(同調)、時には沈黙)話し方」を心がける。「解決する力は話し手にあることを信じて、「アイコンタクト」「うなづき」「笑顔」をもって傾聴する。「相手の身になって気持ちを感じ取るように聴く」「思い込みや先走りをして解釈しない、推測しない、憶測しない」「相手(の言っていること)を無条件に受け止める」「相手の考えや意思を大切に(相手を尊重する)」「すぐに反論しない、批判しない、否定しない」「助言はできるだけ控える」「聴き手の方から結論を出さない」など、様々な行動をもって子どもに接する。

「本来のやり取りの心地よさ」に回帰し、「子どもなりの落ち着き方に任せる」「行動の裏にある感情を感じてその思いを引き取り(共感し)」「わかってくれた、安心した=嬉しい、という感覚を子どもが感じられるように。このような感情(思いや気持ち)のやり取りがコミュニケーションである。言葉でなくて良い。「気持ちを受け取ろう、受け止めよう、読み取ろう、わかろう」という大人の姿勢が大事である。

子どもの心を支えてくれるものは何か。「カリズマティック・アダルト」という言葉がある。「ときに優しく、ときに厳しく見守りつつ、指導してくれる大人」「自分のことを丸ごと受け止めてくれる人」ということである。この要素は、まさに人が「自然」に近づく本質的な欲求である。

言葉かけの見直しとして、「か・き・く・け・こ」という言葉がある。これは下記の内容を示したものである：か=感情的になっていないか、き=傷つけることを言っていないか、く=くどくど言っていないか、け=(子どもを)敬遠していないか、こ=(自分の考えに)こだわり過ぎていないか、である。これらをしないのがまさに「自然」である。「自然」を自身の中に宿すことができなければ、自分の中の既成概念や常識にとらわれてしまう。

「自然(環境)」とは何か、自然環境はどのような要素を持つのか、人はなぜ「自然」に癒しを求めるの

か、という間に正答を与えることはできない。

人は「自然」に受け入れる。現代の豊かで便利になり、快適な環境で生活できるようになった社会においてさえ、「自然」を経験した人の多くは「自然はなくて良い」とは言わない。特に幼児教育あるいは子育てにおいて、「自然」の見方、考え方に関してはその重要性は語り尽くされてきた感があるが、それでもなお語りつくせない、自然、自然環境、自然環境要素の大切さについて、意識を強めたいと考える。

(謝辞)

私立B幼稚園の園長先生、担任の先生及び、保護者の方におかれましては、本論文の作成にあたっての著者の主張に共感していただき、快く貴重な情報をご提供いただき誠にありがとうございました。言葉遣いに関しては、論文の体裁上、過度な丁寧語を使用しておりません。ご了承いただくとともに関係者の方々にはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。本論文では、様々な個人情報が入った資料を参照また引用しております。それらの資料の名称の記載は省略させていただきたいのでご了承ください。

(参考文献)

1. 幼稚園教育要領 (平成20年3月)
2. 幼稚園教育要領 (平成20年7月)
3. 「遊び集 (第3版)」, 佐賀大学文化教育学部附属幼稚園「遊び」研究会, 研究同人, 平成28年1月発行
4. 幼稚園教育要領 (平成29年3月)
5. 幼稚園教育要領 (平成29年3月)
6. 佐賀大学文化教育学部附属幼稚園研究紀要第12集, 平成24年2月.
7. 佐賀大学文化教育学部附属幼稚園研究紀要第13集, 平成24年2月.
8. 幼稚園教育指導資料第1集, 指導計画の作成と保育の展開, 平成25年7月改訂版, 平成25年9月, 文部科学省, フレーベル館.
9. 汐見稔幸他著, よくわかる教育原理, 2011年4月, ミネルヴァ書房.
10. 九州大学大学院教育法制+哲史研究室, 元兼正浩監修, 子ども論エッセンス-教育の原点を求めて-, 2015年4月, 花書院
11. 本村 弥寿子, 領域「環境」に係る保育実践の在り方について, 長崎女子短期大学紀要, 42, 90-08 (2018).
12. 松島のり子, 保育の環境と領域「環境」の関係に関する一考察, お茶ノ水女子大学 人間発達研究, 2016, 1-16.
13. 前迫ゆり, 環境領域の保育活動と保育士養成校における自然環境教育, 奈良佐保短期大学研究紀要, 14, 63-81 (2006).
14. 前田綾子, 子どもと自然の関わりについての一考察 - 保育所保育指針に照らし合わせて -, 人間教育, 3 (1), 27-31 (2020).
15. 長谷 秀輝, 子どもの生活と保育内容「環境」とのつながりについての一考察: 幼児の園での生活と遊びから "生活科" も視野に入れて, 四條畷学園短期大学紀要, 50, 20-31 (2017).